

楽しい国語教室

—国語科行事古典旅行 万葉旅行 明日香の旅—

落 健一・江口 修司・金子 直樹・金本 宣保
世良 馨子・竹盛 浩二・信木 伸一・藤原 敏夫

1997年度に実施した国語科古典旅行について、報告をする。1998年3月23日・24日に、高校一年生の生徒（希望者32名）とともに奈良県橿原市・高市郡明日香村をめぐる、『万葉旅行—明日香の旅—』を行った。万葉集の舞台となった地を訪れ、その世界を実感することができた。明日香風を満喫した旅であった。

一 古典旅行のねらい

古典旅行とは、古典の舞台となった土地を訪れることで、古典の世界を実感してもらおうというねらいで1979年以降行われている行事である。これまで、「万葉旅行」のほか、「源氏物語の旅」・「平家物語の旅」などを実施した年もある。1997年度は、1998年3月23日・24日の両日にわたり、高校一年生を対象に「万葉旅行—明日香の旅—」と題して、奈良県明日香村を中心に自転車でめぐった。古典を、ただ文字の世界で読むのではなく、それを残した人々に思いをはせながら読み味わってほしいと思いつつ、生徒とともにペダルを踏んだ。

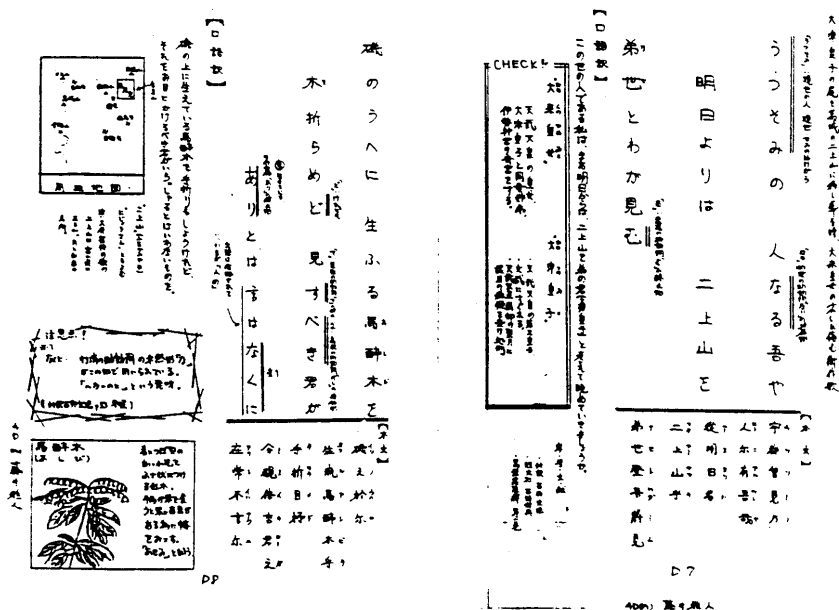
二 古典旅行の実際

1. 事前学習について

古典旅行学習資料集の作成によって、参加生徒の事前学習とした。明日香の地にかかわりの深い、万葉集の歌七十首を、詠まれた場所や内容によって分類した。生徒が一人2・3首ずつ担当し、口語訳や解釈だけでなく、その土地柄や関連する人物の紹介などを加えてそれぞれに解説文を書き、自らの「読み」をまとめた。図書館や教官室にある専門書を利用して調べた生徒も多かった。

また、自転車に乗れない生徒とは自転車の練習もした。6時間ほどの練習で見事に乗りこなせるようになり、旅行当日を待った。

生徒作成の学習資料



2. 現地での学習について

橿原神宮前に着いてすぐに、春の日差しを受けながらレンタサイクルで明日香の地をめぐる。要所では、関連した歌を担当した生徒は、その紹介をした。同じクラスでもない人もいて、少し普段とは勝手が違うようであったが、どの生徒も資料を活用してしっかりと自分の調べたことを説明していた。そして、教官から解説を加えるという形で学習をした。その後、各自自由に時間の許す限り散策をする。その場所は、以下のとおりである。

一日目(23日) 甘樫丘・藤原宮跡・伝磐余池・香具山

二日目(24日) 飛鳥寺・藤原夫人墓・(飛鳥博物館)・飛鳥板蓋宮跡・橘寺・川原寺
*飛鳥博物館は見学のみのみ

行きの新幹線の中で、生徒には次の二つの課題を提示していた。

課題一「自分が担当した歌について、現地を訪れて感じたことを書こう。」

課題二「古典旅行を題材にして、自由に文章を書こう。」

この課題に、宿に着いてからの学習時間と帰りの新幹線の中とで取り組ませた。生徒は、それぞれに苦しみつつ、しかし楽しそうに書いていた。

三 生徒の作品から

課題一「自分が担当した歌について、現地を訪れて感じたことを書こう。」

① 香具山を実際に見て、登ってみた感想は、「小さい」ということです。僕が想像していたよりもはるかに規模が小さいものでした。歌を調べたとき、天の香具山が高くそびえ、藤原京が小さく、そしてその周りの森や林が見渡せる様子を思い浮かべていました。(よくよく考えると、藤原京が小さく見えたなら、立ち上る炊煙が見えるはずがないのですが。)

右と同じように、「大和には、群山あれど」とあるから、大きな山がたくさんあるのかと思ったら、小さい山ばかりでした。特に雷丘。先生の話聞き、雷山の小ささとこの時代のスケールの小ささにショックを受けました。同時に、世界史と比べたら、日本史のスケールも小さいものだと思います。

うまくまとまっていませんが、この古典旅行でわかったこととは、大和時代に繰り広げられた歴史の規模は小さかったということです。

(中川知之・二)

② 私が調べた歌は、両方とも飛鳥川にあこがれる歌

だったので、飛鳥川はよほど風情のある川なんだろうと思っていただけ、明日香村を見る限りでは、とてもそんな雰囲気は想像できなかった。でも、先生が言っていたことや、上流の写真によると、そんな面影も残っているようだから、やっぱり飛鳥川は見てみたかった。

「春過ぎて 夏来るらし」という歌は、百人一首バージョンよりもわかりやすかった。中学生の時に覚えた百人一首は、外国語を覚えているみたいだったけど、万葉集の歌はいくつか読み進めることができてうれしかった。文法とかを勉強したせいもあるだろうけど、万葉集の歌は技巧を気にせずに見たそのままを歌にしているからなのかなと思った。今でさえ明日香村はただの田舎(のように見えた)だけど、飛鳥時代には四千首もの歌が詠まれるほど趣深いところだったのかと思うと、不思議な感じがする。かつてはここは都があって、天皇が住んでいて、暗殺があたりして、日本の中心として栄えていた。いくら想像しても追いつかないくらい、平家物語じゃないけど、「夢の後」という感じですよ。

(長岡久美子・三五六、九六九)

③ 僕の担当した歌は二首で、両方とも天香具山を題材にした歌であった。一首は持統天皇の詠んだ歌で、もう一首は作者が未詳であったが、二人とも天の香具山を見ることによって季節の変化に気づき、それを歌に詠んだものである。今まで天の香具山とはどんな山なのか、その名前といわれから、きっと大きくて高い山なのだろうと思っていましたが、実際の天の香具山を見ると、それはとても小さく、一面木に覆われた小高い丘のようなものであった。甘樫丘の頂上で、それを確認したときには、これが本当に天の香具山なのだろうか疑ってしまうくらい自分の想像していたものを上回る意外なものであった。この時点では、歌を詠んだ二人に対して、本当にこの山を見て詠んだのだろうか、もしそうならスケールが小さいなと思っていた。

しかし、藤原宮跡へ行ってみると、その気持ちは変わった。そこから見ると、天の香具山は別に大きい山のように見えたわけではないが、ただ藤原宮跡から天の香具山までの距離が近いようで遠いように感じたからである。藤原宮跡は広い広場になっていたの、それによって天の香具山が遠くにあるように感じたのかもしれない。また、それに伴って、山自体の大きさも少し大きくなったように見えた。あたり一面野原・畑・森であった藤原京の時代に、このあたりから天の香具山を見ると、どのように見え

たのだろう。きっと、現代とはまったく違う山のように見えたのだろう。持統天皇はまさしく藤原京の大極殿のあった場所から見たのでしょう。作者が未詳の方も、おそらく藤原宮のどこかで天の香具山を見たと思う。それは、藤原京に来ていた旅人かもしれないし、自由に歌を詠む有名でない歌人だったかもしれない。藤原宮跡に立って、そこから天の香具山を見ると、なんとなくこれらの歌を歌った二人の気持ちがわかったような気がした。

(灰咲裕規・二八、一八一―二)

- ④ 私の調べた歌に出てきた神丘こと雷丘(甘樫丘との説もあるが、)はごく小さなものであると本にも書かれていたが、実際のところ、想像以上にささやかなものだった。そこに登って山部赤人は飛鳥京、藤原京を見渡し、古都を偲んだとのことだが、それほど見晴らしがよかったとは思いがたい。風景描写についても、「山高み 河雄大し」などと書かれているが、現在の様子からは想像もつかない。今となっては、昔の明日香の姿がどのようなものであったかわからない。しかし、その真偽がどうであっても、山部赤人にはかまわなかったのであろうと私は思う。ひょっとすると、当時の明日香も今とさほど変わらなかったかもしれないが、彼の心の中では、繁栄する古都の姿が鮮明に浮かび上がっていたに違いないからである。

「朝雲に鶴は乱れ」との記述もあるけれども、それも彼の想像に過ぎなくとも不思議ではない。鶴は繁栄の象徴だったのではなからうか。

どの時代にも、その時代なりの長所があり、短所がある。時代の短所に直面したとき、過去の時代の栄光を懐かしむのは人間のひとつの特性といえるかもしれない。山部赤人の詠んだこの一対の長歌と短歌には、現状に満足しないからこそ過去に自分の理想を求める一人の人間の姿が隠されているような気がする。それはつかの間の現実逃避だったといっても過言ではなからう。日常の生活から離れ、神に近いといわれる森の中での一時は心安らぐものであったはずだ。山部赤人は一人、今はなき古都に思いをよせ、その雄大さ、美しさを夢見たのだろう。

(森本真美・三二四、三二五)

- ⑤ 甘樫丘に登って四方を見渡すと、三方が山に囲まれていることにすぐ気づいた。ここなら、敵に攻め込まれにくいし、静かで、当時の人が離れたくないというのわかるような気がした。

先生の説明を元に自分なりに振り返ってみた。この歌は、都が遠くに移り、人気のなくなった明日香

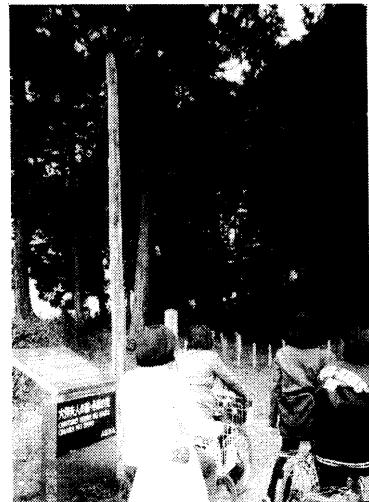
にむなしく風が吹いているという意味であるが、時代は絶えず移り変わっているが、自然は何事にも動じず、偉大だという意味も含まれているように思えた。

当時は、政権がいつ交代するかわからない不安定な時期で、平和で落ち着いた生活を誰もが願っていたと思う。それと同時に、自然に驚き、あこがれたと思う。あるいは逆に、憧れなどを乗り越えて、恐怖を覚えていたかもしれない。自分たちが苦しんでいるときでも、相変わらず堂々としている姿。そこに、人間以上の何か、つまり、神がいるという発想にたどり着いたのかもしれない。また、そこから、人間は、どんな影響も受けてしまい、弱くて小さいもので、自然は絶対的であるという、古代の考え方みたいなものが生まれたのでしょうか。

(藤原かおり・五一、七八)

- ⑥ 天皇は神だなんて、本当に思っているのだろうか、というのが、私の担当した二首を読んでみての率直な感想でした。しかし、本を読んだり、先生の話、特に『もののけ姫』の一言を聞いたときなんだか納得がいったような気がします。もののけ姫が生きた時代よりももっと昔、日本が深い森に覆われ、人々が自然を畏れ、自然とともに暮らしていた時代を想像してみると、私でもそんな気がしてきました。人間にとって未知の場所がたくさんあり、そんな土地で命を落とす人も少なくなかったのだから、大規模な工事を行って、宮殿——言ってみれば人間の世界を作れる力を持った天皇は、やはり神にも見えるのではないか。しかも、この時大海人皇子は、壬申の乱を勝ち抜いた直後だ。結局、天皇のことを神であると本当に思っていたにしろ、いなかったにしろ、この二首はそれぞれの作者の素直な気持ちを歌ったものなんだな、と思いました。

(松本愛・四二六〇、四二六一)



⑦ 今日、真神の原へ行って思ったこと。畑だ。ただ、畑だった。でも、昔はこんなところに狼が出るほどの自然があったんだと思うと、よくここまで開発したなあと感心する。反面、今では狼一匹出ない、狼は確か絶滅したんだって、なんか悲しい。昔の人が畏れ、敬っていた山の神は消え、石で固められた家が幅をきかずようになってしまった。やはり、悲しい。今は狼そのものがないから、恐れようもないし、畏れようもない。家がないのは今は狼のほうである。立場がまるで逆転してしまっている。狼が人を畏れ、恐れてしまっている。なんだか歌の中の冬よりずっと寂しくて切なかった。春なのに。

(山本将義・一六三六)

⑧ 藤原夫人の歌だけでは実在した人だという実感はあまりなかったけど、墓を見たらなんだか実感がわいた。そして、なんだかすごいと思った。もし、藤原夫人がああいうステキな歌を詠んでいなかったら、そんなに有名にもならず忘れられて、「これが墓です」とかも言われずに、ずっとただの山だと思われてるままだったかもしれない。そこへ何百年たった今ごろでも見学者が来たりしてるのは、歌の力だ。すごいなあ。

古文や歴史の勉強をしていて時々、「もしあと二年後くらいにぜんぜん違う学説が出てきて、そっちが正しいってことになったらどうしよう。」と思うことがある。大人になってから、三十年後くらいには学校では少し違う見方で教えてるんだろう。そんなことを思うと、うちの考えてる飛鳥時代は、きょううちらにとって都合がよい飛鳥時代なんだろうと思う。飛鳥時代に限らず、江戸時代でも平安時代でも。だから昔のことを勉強すると必ず「昔はいいなあ。今はいやだなあ。」って思うのかも。でも、いつの時代の人だって世の中をより良くしようとしてきたんだから、いつでも「今」の時代が一番いいはずなのに。少なくとも今の日本は、飛鳥時代から千年分以上のみんなの努力が積み重なってできているはずなのに、そんなによくなったとはあまり思えないような気がする。多分三十世紀くらいの日本の人もこんな風に思うんだろう。そのころまで万葉集は残ってるだろうか？ 明日香川なんかどんな風になっているのか、見てみたい気がする。

(佐能絵美・四四七九、一四六五)



⑨ 自分の調べたのは、真神の原に関する歌だったが、関係の深い場所で、その当時のことを思い浮かべてみると、歌をまた深く味わえる。古典を学習するときに大切なことは、その時代の風景を思い浮かべてみることだ。その歌、文章が書かれた時代の背景を知れば、その歌の意味がわかりやすいし、親しみがわくのでいいと思う。古典を勉強するときは、文法・意味を調べて終わりではなく、その文の書かれた時代を知ることが読み深めるということだとわかった。今まで古典の勉強でそういうことをすることがなかったから、ただの勉強で終わっていた。楽しめる勉強の仕方を知ったと思う。

(小幡祥堂・三二六八、三二六九)

⑩ 僕と明日香川との出会い。それは重機の入ったさんざんな姿の、とても「淵瀬のなきこと」で知られ、とは想像できない貧弱な川であった。川の太さは三級河川にも劣り、水質も決してすくって飲もうとは思えない。いいことといえば、まだ存在しているということくらいで、その姿を見ることはつらかった。しかし、これは現在の様子であって、歌が詠まれた当時は、やはり流れが定まらないといった暴れ馬的なものがあったと思われる。

ものの見方には、実在するものを見ることと、想像の中でのものを見ることという二通りがあると思う。だからといって、どちらか一方だけで見ると現実主義者といわれ、もう片方だけだと妄想に取り付かれた人と言われる。それを避けるため、両方の考え方を持てばいいというわけではない。なぜならば時に現実を見ることは、余計なものを見せると言うからだ。今回のように時代の流れを見るには、想像に頼るべきだと思う。だからといって形がないもので手がかりもないままで、心に浮かぶことはないと思う。明日香川との出会いによって、ものの見方をうまく使うべきだということがわかったような気が

する。

(菅原進司・二七一三、二八五九)



課題二「古典旅行を題材にして、自由に文章を書こう。」

① 私の思いに反し、規模は小さく、昔のきらびやかさ華やかさを視覚で感じられるものはなかった。しかし、藤原京跡などを守りつづけている人々がずっといること、甘樫丘、香具山に登ってみて、ただの観光地に成り下がっていないと感じた。(まあ、守りつづけているのがウリでしょうが、)

特に藤原京。あれだけの土地を長い間残しつづけてきた力はどこからくるのだろうか。藤原京跡から見た天の香具山は、茂る森とか見えないが、人々はそれを残している。現代の科学技術を求める中で、非科学的と場合によっては批判されもする神々。神々の言動が生きているように感じた。

天皇の御製歌として形を変え文字として残るもの、自然の流れ(明日香風・明日香川)として今の私たちの第六感に働きかけるものもあった。歴史の教科書では通り過ぎてしまうこまやかでデリケートな万葉の人々の思いの一端を、この一日という短い時間でも感じる事ができたように思う。

たんぼの花咲く小道は

藤原の文残しし人の歩みし道かも

(宮本祥子)

② 万葉の歌と土地とがとこしえに

いにしえの人を語りつづける

千四百年も昔の人の心が、歌とこの土地の風景によって生き生きと現代によみがえってくるということ、この奈良の明日香に来て、はっきりと感じた。開発によって、街の風景はこれからも変わっていくだろうけれども、この山並みと、そしてこの空気とはこれからもずっと変わらず、いにしえの人の思い

を歌といっしょに語り継いでいくのだな、と月並みだけど、思った。

住む人は時代とともにうつろえど

今日も明日も香る風かな

(小林光美)

③ 失いし面影探す明日香の地

青空のみは今も広がり

(森本真美)

④ 中川知之

天香具山に登りて大和を一望して

よめる歌一首

香具山の上に登りて眺めれば

今は影なき藤原京

技巧も何もありませんが、天香具山に登って藤原京を想像して詠んだものです。天皇は自分の都を見てどう思ったのでしょうか。ただ大和の国が立派だと思っただけなのでしょう。というふうに天皇の気持ちを考えながら詠んだ歌であります。

(中川知之)

⑤ 「川というもの」

飛鳥川に来た。

昔、この川を見た人は、
大切な人のことを思った。

今、この川を見た人は、
あまりのちんけさに
ア然としたらう。

しかし、これは人々が、
つくり出したもの。
川の流れを治め、
支配した。

その結果、生まれたのは
人々のア然とした心。

(菅原進司)

⑥ 香具山について

春過ぎて夏来るらし白妙の

衣乾したり天の香具山

この短歌を、一年半ほど前受験生だった僕は『入試に出る必須短歌』と頭に叩き込まれた。僕は、天の香具山と詠まれるくらいなので、天にとどくほど高い山で、明日香の地にどーんとそびえているものだ、まだ見ぬ香具山に思いをはせていた。そして、今日。甘樫丘から見た“天の香具山”。遠くに堂々とそびえる二上山や、葛城山と違い、少し離れたと

ころで「そんなに見ないで」と言わんばかりにつつましくちょこんとありました。天皇が自らの領地を見るために登ったといわれる香具山。まさかその山が田んぼと家に囲まれた、山とは思えないような代物だとは思わなかった。

しかし、考えてみれば、当時はまわりはすべて森なのである。今のように周りを見ればはるか向こうにそびえる山々が見えたわけではない。見渡しても森、だった。太古より森は人にとって尊敬と畏怖の対象であった。人はそこに恐れと安らぎを感じたのである。ともかく森に阻まれ、見渡すことがまならぬ当時において、香具山のような小さな山でも、頂上に登ればはるか広がる緑の海と都や寺々を、そして自らの領地を天皇は見る事ができたのである。おそらく天皇は香具山に登ることで、征服感と安心感を感じたのであろう。

現代人の目で見れば、香具山は標高一四八メートルのただの小さな山にすぎない。だが、自らをその当時において香具山を眺めてみれば、雨を呼び、国土を治め、天から下った神秘的な力を持つ、神聖な山なのである。いにしへの地を訪れる際、こんな視点の変換は、実は重要なのであろう。

(藤井雅人)

- ⑦ やっぱり歴史のある場所はいいなあ、と思った。私の住んでいるあたりは干拓地なので、とくにああいう遺跡とかいわれとかがないので寂しい。当時とはぜんぜん違う風景なのを、「心の目で」見るのがおもしろい。いろいろ想像していると、うちもそのくらい昔に生まれて歌とか詠んでたかったなあ、と思う。そしてきれいな明日香川とかを見る。明日香川があんなになってたのはガッカリだった。歌とかのイメージではすごくきれいな川を想像してたのに。でもそのうち原型をとどめなくなっていくんだろうなあ。もったいない。

今回の旅行に来て、こういう昔の遺跡とかをまわるのもけっこうおもしろいなあと思った。今度おじいちゃんちのあたりを歩いてこようと思った。吉備路のあたりだ。以前国分尼寺の跡とかへ行ったときは、「何、この石ころばっか転がってるところは？」としか思わなかったけれど、今度行ったら、今回の経験を生かして、心の目で寺を見られるだろうと思う。

(佐能絵美)

- ⑧ 明日香の地を訪れて

私は明日香川を見て、そして明日香川の昔の姿を想像してみました。現在の甘樫丘からは、ビルとコ

ンクリートに覆われた川が見えますが、それらを森と土のままの土手に置き換えてみたのです。なるほどここを都に選んだ理由は納得できます。平野の中心部に都を造営するよりは、森の中のほうが心は安らぎますね。部屋を中心に一人立つよりも、端のほうがなぜか落ち着く、あの感覚かなあとも考えました。

そうであれば、山も重要ということになります。地面からこんもりと盛り上がり、私たちを見下ろす山ならば、山に人格も出てくるでしょう。「豊かさ」についてはあえて触れません。しかし、自然を対象として見たことで、心に隙間を作ってしまったと思うのは私だけでしょうか。

私たちは自然の一部であって、それならば、私か私の想像の中で森に対して感じる親しみおよび懐かしみは当然のことと言えましょう。この地に都を造り、生活してきた人々もまた、私は想像しました。森の中の道を通り畑に行き、その人たちを想像すればするほど、目標のない帰属意識は高まり、私たちはもしかしたら大きな勘違いをしているのではないかという不安に駆られるのです。そして、私は私の周りの世界が、頼りなく見えることが確かにあるのです。

そのいろいろ考えをめぐらせたことは、私をあることに導いてくれました。明日香は私の仮想の心のふるさとの構成員となり得ること。また私の心のふるさとは、はっきりとしたイメージではないこと。私が私の想像を通して、心が静まったところが私のふるさとではないでしょうか。明日香の地は確かに私の心を落ち着けてくれました。自転車でもまわっても、私の近所をまわっているようでした。明日香の地に、また来ようと思います。明日香の地は気に入ったのです。

(三好拓志)

四 まとめ

古典作品の舞台となった土地を訪れても、実際目にするのは何の変哲もない、現代の田舎の風景である。自分の家の周りの風景と、特に変わったところがあるというわけではない。しかし、生徒の作文を読んでも、明日香の地に来たからこそ気づいたこと考えたことが随所にある。福山で、文字と写真と地図によって理解していたこととはまた違った「読み」が生まれている。それを生み出したものは、生徒一人一人の「想像力」であった。目の前にある風景からコンクリートやアスファルトを取り除き、森や都を配置する。

そこには人間も登場する。そうして、生徒たちは歌に託された、その人々の心まで想像し得た。1400年前の人々は生徒たちと万葉集を通して関わりあったのである。そして、それを「楽しかった」と生徒は感じている。文字の世界で学習していたときは「カンケイナイ」人々であったろう。その人たちと、この地に来ることによって「関係をつくる」ことができ、その楽しさを味わうことができた。明日香に吹く風は、生徒たちを1400年前に運んだのだった。

1997年度古典旅行

日 時 1998年3月23日(月)～3月24日(火)

参加生徒 広島大学附属福山中・高等学校4年生 32名

旅行日程 3月23日(月) 8時30分 福山駅約り人権前集合

23日(月)	24日(火)
8:30 集合(福山駅約り人権前)	6:30 起床
9:00 福山発(ひかり102号)	7:30 朝食
10:32 京都着	8:30 宿舎出発
10:45 京都発(近鉄特急1019)	-レンタサイクルで移動-
11:34 橿原神宮前着	飛鳥寺
12:00 甘樫丘(昼食)	大原 橿原夫人墓
-レンタサイクルで移動-	飛鳥板蓋宮跡
橿原宮跡	楠寺 など
天香久山	12:00 川原寺(昼食)
笠余池	13:57 橿原神宮前発
17:00 宿舎到着	(近鉄特急1318)
17:30 入浴	14:49 京都着
19:00 夕食	15:24 京都発(ひかり135号)
20:00	16:59 福山着・解散
学習会	
21:00	
22:20 点呼・諸連絡	
22:30 消灯・就寝	

宿 舎 「好生旅館」 橿原市久米町901 橿原神宮前駅マフ
☎ 07442-2-2417